

## 公開講演会発表要旨

### 長屋王邸を掘る

**平城京の調査** 平城宮の発掘調査にくらべて、京域の調査は遅れた。寺院における部分的な調査を除くと、京域の本格的な調査は、昭和39年の国道24号線バイパス建設に伴う調査が最初。その後、市街地拡大に比例して調査面積が広がり、貴族の邸宅、庶民の住宅などの構造が次第にあきらかになり、平城京復原の内容を豊かにしてきた。しかし、いずれも開発工事に伴う調査であり、発掘後には、確実に消失しているのが惜しまれる。(町田 章)

**長屋王邸宅跡の変遷** 左京三条二坊一・二・七・八坪における調査経過と遺構変遷について報告。調査地は奈良時代当初、長屋王と吉備内親王の4町規模の宅地であった。長屋王の変の後の改作をはさみ、恭仁遷都後は各坪に分割され、その後4町(?)規模の宅地となり、再び各坪に分かれるという変遷をたどる。調査結果とあわせて、貴族の邸宅には、左右対称の建物配置と堀で区画してそれぞれに建物を配するものがあることを指摘した。(小林 謙一)

**長屋王邸と「長屋皇宮木簡」** 長屋王邸内の井戸から出土した200点余りの木簡の中に、「長屋皇宮」と記載のあるものが3点あった。その木簡は、長屋王邸に送付された米の荷札であり、一連の発掘調査によって検出された奈良時代初めの4町規模の宅地の主が長屋王であることが判明した。赤外線カメラによって長屋皇宮が確認された経緯と、木簡の出土状況とその内容について報告した。(綾村 宏)

**平城宮朱雀門の復原** 朱雀門は、奈良時代の平城宮南面中央に開く正門であり、1964年の発掘調査によって、門の位置と規模が確認された。以後、復原図の作成を経て、復原模型が製作され、復原にむけての基礎的な調査研究が進められている。しかし、実際の復原に際しては、遺構面を損傷しない工法が望まれること、ヒノキの大径木等適合材の入手の可否、古代の木造建築が構造上潜在的にもつ水平力に弱い部分の補強、現行の建築基準法との適合等様々な問題が提起される。こうした問題について、材料・構造・施工の視点から検討を加えるとともに、現行法規との関連を踏まえて、必要最小限度の鉄骨による構造補強案を示し、実際の朱雀門復原への可能性を追求した。(内田 昭人)

**平安貴族は瓦葺邸宅に住んでいなかった** 昭和54～55年に調査された平安京右京一条三坊九町における「平安時代初期の貴族邸宅跡」では、正殿をはじめとする中心的建物を総瓦葺屋根に復原した。しかし、出土した瓦を数量的に分析すると、この復原案は誤りであり、「平瓦」として報告された瓦は、屋根の大棟のみを覆う「榎斗瓦」、「軒瓦」は、その下に込めた「葺瓦」であることがわかる。屋根の葺材の違いは、防湿・耐火などの機能性以外に、居住者の社会的地位や経済力をも反映しており、九町の中心的建物における大棟以外の屋根勾配部分は檜皮葺に復原できる。今後、都城内邸宅や都城内景観を復原するためには、瓦の出土状況を踏まえた上で、平瓦・丸瓦をも含めた数量分析を深める必要がある。(上原 真人)